和歌山県知事 岸本周平

略　歴
1956年　7月12日、和歌山市生まれ
1969年　和歌山市立広瀬小学校卒業
1972年　和歌山市立城東中学校卒業
1975年　和歌山県立桐蔭高等学校卒業
1980年　東京大学法学部卒業、大蔵省入省
1985年　名古屋国税局 関税務署長
1986年　内閣総理大臣秘書官付
1990年　大蔵省 主計局主査
1995年　プリンストン大学 国際問題研究所 客員研究員
1996年　プリンストン大学 東洋学部 客員講師
1998年　大蔵省 国際局 アジア通貨室長
2000年　通商産業省 情報処理システム開発課長
2001年　経済産業省 文化情報関連産業課長
2002年　財務省 理財局 国庫課長
2004年　トヨタ自動車㈱渉外部長、内閣府政策参与兼務
2009年　第45回衆議院選挙にて1期目当選（連続5期当選）
2012年　経済産業大臣政務官、内閣府大臣政務官
2022年　12月17日、和歌山県知事就任
趣　味　読書、映画鑑賞、柔道（3段）

笑顔をつくること、それが私たちの仕事です。

〝和歌山が最高！だと　子どもたちが思う未来を！〟というキャッチフレーズを掲げ、昨年12月に就任した岸本周平和歌山県知事にインタビュー。新しい県政運営への意気込みを聞いた。

——岸本知事は和歌山市出身ですが、どのような子供時代を過ごしていたのか、またいつから政治家を目指していたのかなどお聞かせください。

岸本知事（以下岸本）　小学生の頃は内気で大人しく、時間があれば本を読んでいて、同じクラスの女の子に声をかけられたら顔を真っ赤にして下を向くような子供でした（笑）。〝これじゃまずいぞ〟と思った父親は、町の柔道場に通わせてくれました。そこで週3日、小学校と中学校の9年間通い続けました。その道場では毎年1週間の〝寒稽古〟があるんですが、9年間休まず参加し皆勤賞を取りました。それが一番の自慢です。そして選挙のために和歌山へ帰った48歳の時、その柔道の先生に挨拶に行きました。当然忘れているだろうと思っていたのですが〝覚えてるよ。柔道は強くなかったけど皆勤賞取った子やな〟って（笑）。でも中学生の時にはすでに黒帯で、それなりに強かったんですよ。弁論部にも入り、少しずつ人前で話せるようになり、中学校や高校では生徒会長になりました。内気な子供だったのがいつの間にか〝目立ちたがり〟になっていたんです（笑）。そのまま大人になって、縁があって政治家になったって感じですね。

〝街頭演説〟が大好きで最高の趣味だった

——衆議院議員を13年間務められた後、知事に就任されたわけですが、生活リズムがかなり変わったと思います。

岸本　国会議員の生活は不規則です。国会期間中は本会議や委員会などで多忙にも関わらず、割と自由な時間があったり、逆に夜は遅かったりします。それが知事に就任してからは、びっしり隙間なく予定が入りますが、ある程度決まった時間に登庁し、決まった時間に退庁するという規則正しい生活になったので全く違いますね。まだご存じの方も多いですが、選挙で負けて浪人中は毎日、当選してからは土日と月曜の朝は欠かさずスーパーマーケットや駅に立っていました。〝街頭演説〟が大好きで、最高の趣味だったんです。街頭演説とはいいますが、実は演説はしていません。多くの人の話を聞く〝触れ合いの場〟なんです。そういう〝街頭演説〟が大好きでしたが、雑踏の中で足を踏まれたり脇腹をこづかれたりしたこともありました。国会議員なら私ひとりの責任ですみましたが、知事という組織の長ともなるとそういうわけにもいきません。警備をしてもらって街頭演説をするのはおかしいので、みんなと相談したら、やめなさいってことになりました。しかしそういう〝場〟がなくなってしまうのは辛い。そこでこれからは私が県内の各地へ出向き、県民の皆さんの話を聞く〝場〟を新たに作ることにしました。

〝県民を幸せにすること〟が県庁のミッション

——県政の運営にあたり、どういったことを大事にされたいですか。

岸本　県庁という大きな組織において、知事ひとりでやれることには限界があり

知事就任時の職員訓示

ますので、職員一人ひとりがどれだけパフォーマンスを上げてくれるかにかかっています。県庁として最も重要なミッションは〝県民を幸せにすること〟。幸せって人によって違いますが、幸せな人が〝笑顔〟であることは確かなんです。だから我々の最大の目的は、県民の皆さんを笑顔にすることだと考えています。県庁では大勢の職員が働いていますが、その職員自身が幸せでないと、人を幸せにできるわけがありません。私は職場の長として、職員には自分自身にとっての幸せを真剣に追求してもらいたいと考えています。元々の能力が100であれば、幸せだったら倍の200の力を出すことができる。そういう職場を作るのが私の仕事です。自分の仕事に誇りを持ち、上司であろうと知事であろうと忖度せず、違うものは〝違いますよ〟と言えなければなりません。〝前例がない〟という言葉はタブーにして、職員と一緒にチャレンジしていきます。

和歌山県の課題と将来像

——和歌山県が抱える課題は多いと思いますが、どのように対処されますか。

岸本　少子高齢化や産業競争力の低下など問題が山積みです。だからこそ〝実験精神〟で新しいことにチャレンジすべきだと思います。以前、トヨタ自動車に勤務していたときのことですが、そこで驚いたのは毎日の〝改善運動〟です。工場で車を作る時も、販売店で車を売る時も、やり方を毎日変えるんです。毎日となるとどうしても失敗することが多いのですが、失敗しても上司は、〝ナイストライ！またやり直そう〟って部下を励ましし、絶対に叱りません。これを毎日繰り返すのですから、成功例が100のうちの一つだったとしても、積み重なるとものすごく変わるんです。やってみて駄目ならやり直せばいい。県庁にもそういう空気を作りたいと思っています。またこれまで培った人脈があるので、ITベンチャーの方やアスリート、文化人といった全国的に活躍している方々に集まってもらって、和歌山県に対してアイデアを出してもらう。それぞれがインフルエンサーでもありますので、和歌山県のファンになってもらって情報発信してもらうことも企んでいます。もちろん現場にも来てもらって、県内の若い経営者や女性、或いはボランティアをやっている方、地域で頑張っている元気な人たちと一緒になって、色々なアイデアを出していただく。そしてその中から実現可能性の高いものを、職員が〝実験精神〟でやってみる。そういうプラットフォームを作りたいと考えています。

——県政にはいろいろな課題がありますが、特に力を入れようと思っているのは、どういった分野ですか。

岸本　先ずは第一次産業です。20世紀型の経済は、石油や石炭を燃やし〝24時間働けます！〟みたいな経済至上主義でした。しかし時代は令和になり、脱炭素の世の中になってパラダイムシフトが起きています。そんな中、自然に恵まれた和歌山県だからこそ、もう一度、第一次産業に光を当てたいです。観光産業は元々強いですから、第一次産業とコラボさせて、例えば果物狩りや釣りといった体験型観光を進めれば車の両輪になります。南紀白浜空港の民営化が一つの引き金だったと思いますが、ワーケーションやIT企業の誘致が進み、紀南地域が全国から注目されるようになりました。本州最南端の串本町には〝スペースポート紀伊〟という日本初の民間小型ロケット発射場が完成しました。種子島に発射を何度も見に行ったことがありますが、ロケットというのは大勢の人を集めることができる強力なコンテンツです。ロケットは年間最大20機発射するということですから、発射を見に来た観光客に県内を周遊してもらう新しい観光ルートを作ることができると思いますし、何か全く新しいものができてくるかもしれません。

提供：スペースワン株式会社

——少子高齢化については、どのようにお考えでしょうか？

岸本　健康寿命が伸びること自体はめでたい話です。しかし県内のどこに行っても〝子供が少ない〟という声が聞こえてきます。年間300万人近くの子供が生まれた時代がありましたが、今は80万人を割っています。出生率を上げても人口が減ることは防げないのですが、減少のスピードを食い止めることはできるので、思いっきりやります。和歌山県は子育てがしやすいって思ってもらえれば、IターンやUターンも増えます。そのためには子育て世代の経済的負担を市町村と一緒になってできる限り減らし、子供食堂のように地域の人々が集まる場所を作っていくことが大事だと考えています。

海外との交流 未来への種をまきたい

——インバウンドも復活しつつあります。海外との交流はどのように進めていかれますか。

岸本　財務省や経産省ではインターナショナルな仕事をずっとしていました。国際金融の担当であったときは、1年のうちの半分は海外出張でした。そんな経験もあり、これからは東京を向くのではなく、直接海外と色々な交流をしたいと思っています。和歌山県はこれまで、中国の山東省やスペインのサンティアゴ巡礼道などとの間で友好関係を築いてきました。四川省やインドのマハラシュトラ州といった新しい交流にもチャレンジしてきています。ベトナムには一昨年からミカンを輸出し始め、その輸出量はどんどん増えています。アジアを中心に色んな交流をしたいと考えています。これは本当に夢の夢ですが、アジアからの留学生を受け入れる専門の学校を作りたい。例えば、土木・建築や工業、あるいはアートの学校ですが、全寮制で半分が日本人でもう半分が留学生。英語と日本語で勉強することで、日本人は英語が上手くなり、留学生は日本語が話せるようになる。さらに資格も取れるようにして、留学生は卒業したら県内の企業に正社員として就職してもらう。簡単にはできないけれど、そういう種をまきたいと思っています。

和歌山が最高だと子どもたちが思う未来を

——最後に、知事としての抱負をお話しいただけますか。

岸本　〝和歌山が最高！だと子どもたちが思う未来を！〟という選挙中のキャッチフレーズがすべてを物語っていますが、子供たちに〝和歌山が最高！〟と思ってもらうためには、大人が常にそう思っていないとダメです。和歌山の人って割と遠慮深いところがあり、自虐的に和歌山を卑下するようなことがあるんですよね。子供に対して〝県内には働く場所がないから、勉強して県外のいい大学に入って、いい会社に就職しなさい〟みたいなことを言っていたら帰ってきません。そうじゃなくて和歌山県には歴史も伝統も文化も素晴らしいものがたくさんあるのですから、そういった良いものを再認識して、和歌山県民として誇りを持ってもらいたいです。和歌山県には海があり山があり川があります。和歌山市内なんて車を使えば10分でリゾートに行けますから。そんなところは他にはないですよ。食べ物も美味しいし、人情もある。ずっと和歌山にいるとこれが普通だろうと思ってしまうかもしれませんが、ものすごいことなんです。県民一人ひとりに、和歌山県の活性化は他人事ではなく、自分事だと思っていただいて、みんなで力を合わせる。明るい笑顔あふれる和歌山県を作っていきます。